

親子で畳店の伝統を守る渡辺良夫さん(右)と隆也さん=下妻市大串



伝統と信頼、親子で守る

畳

下妻市

1905(明治38)年創業の老舗で下妻市大串の「渡辺畳店」は、4代目渡辺良夫さん(66)と長男の5代目隆也さん(38)の親子二人三脚で伝統と技術、地域の信頼を守り抜いている。

良夫さんは夜学で高校に通い、16歳から職人の道へ。隆也さんも同じ道を志し、高校卒業後、京都市内の京都畳技術専門学院で学びつつ親方の下で4年間修業。2007年には国家検定の1級畳製作技能士の資格を取った。

作業場はイ草やわらのにおいに包まれている。顧客は市内外の一般住宅や寺院、工務店などさまざま。良夫さんは「100年以上付き合っているとこちらもあてしなう」と長年の愛顧に感謝する。

畳は長方形の1畳と正方形の半畳2種類が基本。畳の縁は色や模様が多样で、和モダンの内装などデザイン重視で縁なし畳やカラー畳も人気と

いう。

畳替えの作業は新品の畳のほか「表替え」「裏返し」があり、使用年数に応じて対応する。取材した日は表替えの作業だった。隆也さんが劣化した畳表を剥ぎ取り、畳の中心部である畳床の補修へ。畳床の角が崩れている場所を見極め、専用の針と糸で慣れた手つきで縫う。さらに最新の畳製造ラインで畳表を正確に縫い、最後は良夫さんが約30年利用しているという、年季の入った専用機で縁を縫い付けた。凹凸がないよう念入りに微調整を図って仕上げた。

特殊な道具も多く伝統的な手業が生きる現場。この道50年の良夫さんは「毎日同じような仕事でも中身が違ふ。常に勉強、向上心がないと駄目だと思つ」と強調。「いかにきれいに仕上げるか。畳がピタッと収まり、お客さんから喜んでもらえる時がうれしい」と話す。隆也さんは約10年前から5代目を名乗り、責任が重くなった。「(父とは)経験が違い、相談できる相手がいるのは大きい。畳職人の世界を絶やしたくない」と技術継承を誓つ。